



Title	デザイン作品とアート・ドキュメンテーション : 大学コレクションの場合
Author(s)	西村, 美香
Citation	デザイン理論. 2007, 50, p. 162-163
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/53090
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

デザイン作品とアート・ドキュメンテーション — 大学コレクションの場合 —

西村美香／明星大学

ポスターなどのデザイン作品は、絵画や彫刻などいわゆるファイン・アートと呼ばれるものとは鑑賞の視点が異なる。デザイン作品や資料では、それがなぜそのような形や表現で世の中に現れることになったのか、それら作品の背景が語られて初めて活きた資料となり鑑賞もできる。そのためにはミュージアム運営に欠かせないアート・ドキュメンテーションが芸術作品を扱うのとは違った視点で要求される。アート・ドキュメンテーションとは作品の収集・整理・保存・利用のそれぞれの課程を総合的にとらえる視点と手法のことである。デザイン作品におけるアート・ドキュメンテーションの在り方を考えるのが本発表の目的である。そして探る手だてとしては、具体的に京都工芸繊維大学美術工芸資料館と武蔵野美術大学美術資料図書館の二施設を取りあげ調査を進めた。調査の対象に大学が運営するミュージアムおよび大学所蔵のコレクションをとりあげた理由は、それらが教育機関・研究機関との位置づけで採算性とは離れて比較的研究主体で運営が可能であり、学究的な意味でのアート・ドキュメンテーションの在り方を牽引すると考えたからである。

京都工芸繊維大学美術工芸資料館と武蔵野美術大学美術資料図書館は日本で十数カ所あるデザイン分野の所蔵を有する大学ミュージアムのうちでも、所蔵品数からいっても網羅する範疇からいっても、ともにトップレベルにある。開学より百年を超える歴史をもちその当初より文部省のバックアップを受け所蔵品の収集と充実に力を注いだ国立京都工芸繊維大学と1960年代の高度経済成長に支えられ

た高等教育機関への進学熱を背景に学校経営に乗り出し、大学設置基準が要求する条件のもと図書館を用意せねばならずその併設機関として美術館機能を有した施設を設置した私立武蔵野美術大学。国立と私立の違いからそのミュージアム設立の経緯や運営の仕方には違いがある。前者は明治創立以来の膨大な所蔵をもち、後者はゼロからの出発で所蔵品獲得のため同窓の力を活用した。しかし所蔵の経緯や内容は違えども、それらはいまや学内だけでなく広く社会に開いて活用していこうという風潮にある。そのためにはデータを集め整理しアーカイブとして整え、それをさらにデジタル化して誰もが利用できるようにWeb上に公開することが求められている。しかし現実には資料の整理だけでも大変な重労働であり、その情報をまとめたうえのデータ分析やさらに研究と、それらを限られた人材と予算内で行うのは至難である。現在、両校でもアーカイブのデジタル化は途上であり、公開は行っていない。

アート・ドキュメンテーションの運営のひとつに所蔵品についてその存在と意味の証拠をそろえて情報記録を作成・管理することがある。大学においては人海戦術で対処できる作業は学生が大いに力になってくれようが、存在と意味の証拠を示す情報記録作成つまり作品のデータ分析はそれだけでは対応できない。専門の知識を伴った調査・研究が必要となる。そこでは学内の専門家はもちろんのことそれだけでなく学外の専門家の協力も必要とされるだろう。この他にもドキュメンテーション運営の難しさはある。例えばWeb公

開に際しての画像のデジタル化である。印刷物つまりポスターなどは、その画像をデジタル化することは複製の可能性をはらみ難しい。技術的には何も障害はないが逆に技術が進み高解像度の画像の添付が可能になればそれをもとに精密な複製をつくりだすことが可能になる。オリジナルと寸分違わぬ図柄のコピーができるのである。ではそれは贋作なのであろうか、オリジナルでないことは確かである。複製物の複製、その存在をどう捉えればよいのだろう。また、著作権に関しても利害が絡みはしないのか気になる。この問題ひとつをとってもデザイン資料のドキュメンテーションは管理には芸術作品とはまた違った視点が要求され違った意味で神経を使うというのがわかる。いまひとつ管理を含むドキュメンテーション運営の難しさとしてデジタル化はデータ更新の履歴が見えにくいということも挙げられる。いつ誰がそのデータを書き換えたのかあるいは新しく書き加えたのか、そして以前のデータはどうであったのか、それらが上書きにより消されてしまい残らないからだ。加筆の跡が見えないデジタル・データはあたかもそれが完璧であるかのような絶対性を装い油断がならない。

デジタル化による Web 上への公開は、現物に当たらないで研究がデータにのみ頼ってしまう傾向を促進する側面ももつ。確かに画像があれば、それは図柄、何を描いてあるかは伝えてくれる。しかしそれがどんな分厚さでそしていかなる風合いの紙に刷られ、インクの発色がどんな具合で表面がどのような様子なのかは伝えてくれない。いったいいつ誰がどこで、どのように、どうした目的で制作し、そして集められたのか、それらを現物の紙やインクが伝えてくれるときがある。デジタル・データは情報がある程度削ぎ落とされていることを認識しておかなければならない。

アート・ドキュメンテーションにおけるデザイン資料の扱いは特有の問題をはらみながらアーカイブのデジタル化、そしてその公開が現在試行的に行われている。リスクもあるもののやはりアーカイブの公開はドキュメンテーションには必要で、有効な手だてのひとつになると考える。デザイン資料はそれらものの背景が語られてこそ活きた資料となる。作品の来歴が知れるとその素性が知れ、なぜそれが生み出されそしてここにあるのか、その時代の生活様式や経済の状況、ときには政策や政略さえ見えることがある。それらを伝える資料としてデザイン作品はその価値を増す。そのためには多くの知識の積み上げが期待されるアーカイブの公開、それがもたらす成果の大きさは計り知れない。デザイン資料にとってデータの充実必須である。ポスターにしるプロダクト製品にしるデザインはどうしてそのような見かけ、身なりになって世の中に登場することになったのか、それを読み解くことが必要なのである。しかし、この読み解く研究がなかなか進んでいないのが現状ではなかろうか。膨大な作業量に対しての人材配置の少なさそして限られた予算などが障害としてあげられる。大学のミュージアムはまだしも民間の美術館ではさらに利潤追求を課され、展覧会企画に手一杯で研究に関してはドキュメンテーション活動に偏りがみえるところさえある。作品の背景を語れるだけのデータを揃えたアーカイブの作成・管理までドキュメンテーションを充実させているところはおそらく少ないと考える。そういった意味では日本にはまだ本当の意味でのデザイン・ミュージアムは存在していないのかもしれない。こうした状況下においてアーカイブのデジタル化と公開は新しい方策を示してくれようとしている。